

短刀

たんとう【F-17053】

長船長義作
鍛鉄製 1口
南北朝時代・正平17年(1362)
川田龍吉氏寄贈
修理 本阿弥道弘
刃長 27.6cm 反り 0.2cm

修理前



工程



砥石によって刀身を研いで錆を取ります(左図)。砥石を砕いたものなどを用いて地鉄や刃文の特徴を引き出します(右図)。

修理後



錆を取ることで、短刀の美術的な特徴を取り戻しました。また、新たに製作された白鞘によって安定した保管が可能になりました。



長義は南北朝時代に活躍した備前国長船派の刀工です。備前鍛冶には珍しく、沸を主体にした激しさを感じさせる地鉄・刃文を示す作風が知られています。

サビがとれてきれいになるのが楽しみね!



薄錆があり、刃先の一部に錆を生じていました。刃先の錆は刀身と鞘の内部が一部に接触して発生したもので、新たに保管用の白鞘(白木の鞘)を製作することになりました。

重要雑録

じゅうようざつろく【館資672】

1冊
明治16～17年(1883～84)
修理 有限会社東京修復保存センター

修理前



本紙が劣化して枯葉状になり、触れるたびに崩れて欠損が拡大してしまう状態でした。

工程



修理後



リーフキャストイングを行ない、再度綴じ直しました。表紙は当初のものではなかったため、このたび新調しました。

関連事業

最新情報はウェブサイトで <http://www.tnm.jp/>

●講演会

月例講演会「平成の大修理を終えた国宝・檜図屏風【ひのきずびょうぶ】」
日時：2月21日(土)13:30～15:00
講師：神庭信幸(保存修復課長)
田沢裕賀(絵画・彫刻室長)

月例講演会「保存の道を探求して」
日時：3月14日(土)13:30～15:00
講師：神庭信幸(保存修復課長)

*講演会の会場は東京文化財研究所セミナー室、定員110名(先着順)、聴講無料
(ただし当館の入館券が必要。半券でも可)
*開場は開始の30分前予定

●ギャラリートーク

檜図屏風と平成の大修理
①永徳一門による檜図
日時：2月17日(火)14:00～14:30
本館地下 みどりのライオン
講師：山下善也(絵画・彫刻室主任研究員)

②檜図屏風 平成の大修理
日時：2月17日(火)14:30～15:00
本館地下 みどりのライオン
講師：神庭信幸(保存修復課長)

絵画・書跡修理の現場から
日時：2月24日(火)14:00～14:30
本館特別1室
講師：沖松健次郎(保存修復室主任研究員)

予防保存と修理保存
日時：3月3日(火)14:00～14:30
本館17室
講師：和田浩(環境保存室長)

愛染明王の事と、その修理前後
日時：3月10日(火)14:00～14:30
本館11室
講師：鷲塚麻季(調査研究課主任研究員)

東京国立博物館 コレクションの 保存と修理

平成27年2月17日(火)～3月15日(日) 本館 特別1室

本特集は今年度で15回目を迎えました。このリーフレットでは、今回展示する作品を中心に、「瑠璃地金彩唐草文仙蓋瓶」「重要文化財 四季山水図(春・夏)」「短刀」「重要雑録」の4件をとりあげました。陶磁、絵画、刀剣、館史資料それぞれの分野の作品がもつ材質や構造、修理前の状態とともに、修理方針、工程、修理の過程で判明した情報を紹介いたします。

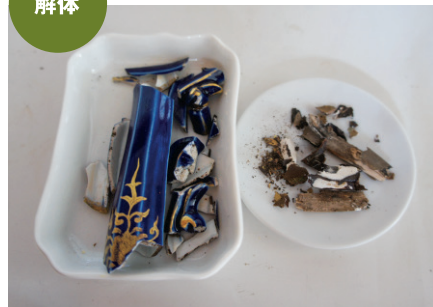
瑠璃地金彩唐草文仙蓋瓶

るりじきんさいからくさもんせんさんびん【G-214】

仙蓋瓶とよばれる形で、中国陶磁に倣った作品です。明治6年のウィーン万国博覧会に出品されました。瑠璃地に金彩を施した器はフランス・セーブル窯ではいち早くとり入れられており、19世紀のヨーロッパでも大変人気がありました。作者の四代高橋道八(1845～97)は仁阿弥道八の孫で、明治期の京都における製陶に重要な役割を果たした名工として知られています。

四代高橋道八作
磁製 2口のうち
明治6年(1873)
高橋道八氏寄贈
修理 陶磁器修復
たま工房
高 27.9cm
口径 5.8cm
底径 8.6cm

解体



旧修理部分を解体したところ、接着剤には漆が用いられており、欠失部分には木片や漆と木粉を合わせたものや石膏の補填材が用いられていたことが判明しました。

工程



大きめの欠失部にはポリエステルパテで作った補填片を接合しました。微細な欠失箇所には修理用の充填材を用いて整えました。こののち本体と接合し、欠失部分や磨耗部分を補彩しました。

修理前



修理後



四季山水図のうち春・夏

重要文化財

しきさんすいず【A-10933】

室町時代の代表的な禅僧絵師・雪舟（1420～1506?）が、応仁元年（1467）48歳のとき遣明使に随行して中国に渡り、中国滞在中に明の画風に倣って描いたと考えられる作品です。ダイナミックかつ骨組みのしっかりした構図が特徴で、梅花を眺める人物や家屋などを点景とする春景、瀑布とそれを眺める人物などを点景とする夏景、山市や楼閣を点景とする秋景、雪中に傘をさして橋を渡る人物や家屋などを点景とする冬景の4幅で構成されます。

料絹やそれを支える裏打紙と裏打ちに使用された糊が劣化して柔軟性が失われたことが原因の一つと見られる強い折れが本紙全体に生じ、折れ山に料絹の裂けや擦れ、浮きが多数見られ、今後も損傷の進行が懸念される危険な状態でした。茶色や白色の斑状のしみが鑑賞性を損ね、また、「春」「夏」は青みが強く絹が透けた軽い印象、「秋」「冬」は茶色みが強く絹が詰まった重い印象と、本紙の見え方の印象も不自然に違っていました。



「冬」



「秋」



「夏」



「春」

修理後

新規に裏打ちをし、折れ伏せを施したことで、安全で安定した状態で保管・展示ができるようになりました。また、肌裏紙の色調、糊の層の厚さの調整を行なったことで、しみや地透けが緩和され、本紙の見え方の印象も統一感のあるものとなりました。



「冬」



「秋」



「夏」



「春」

裏打ち

絹や紙に描かれた作品（本紙）の裏全面に、保護や強化のために和紙を接着すること。そこに用いられる紙を裏打紙といい、本紙に直接触れる1層目は肌裏紙、あるいは単に肌裏といいます。

雪舟等楊筆
絹本墨画淡彩 4幅のうち
室町時代・15世紀

本紙
春 149.1cm×75.8cm
夏 149.4cm×75.7cm
秋 149.2cm×75.7cm
冬 149.1cm×75.8cm
表具
春 266.0cm×91.3cm
夏 266.0cm×91.3cm
秋 265.7cm×91.1cm
冬 265.7cm×91.3cm

修理 株式会社半田九清堂

よく見ると、
確かに色みや
濃淡が
バラバラね



工程

裏打紙を除くと、「春」「夏」では墨色系、「秋」「冬」では黄土色系の肌裏紙が用いられていました。さらに肌裏紙を除去すると、本紙裏面に、「春」「夏」では透明な糊の層が斑状に残り、「秋」「冬」では茶色い糊の層が、絹目にめり込むように全面に付着していました。表面のしみや見え方の違いには、これらが影響していることがわかりました。

そこで、「春」「夏」は本紙に負担のかからない範囲で糊を除去あるいは糊の層を薄く調整しました。一方、「秋」「冬」は糊の付着が強固で、安全かつ均一に除去するのが困難であったため、しみの箇所のみ層を薄くなるよう調整し、それ以外は除去せず残しました。本紙の見え方の統一感を出すため、肌裏紙を本紙料絹に近い色調に染め、幅ごとに微調整しました。

「冬」



「秋」



「夏」



「春」



旧肌裏紙除去後
本紙裏面

本紙裏面糊層
顕微鏡写真

旧肌裏紙

新規肌裏紙

●折れの緩和

修理前



修理後



●表装

表装は本紙の支持や保護の役目だけでなく、作品の内容、風格に合わせて作品を引き立たせる役目もあるので、表装裂や軸先などの選択はとても重要です。今回は元の表装に作品に相応しい風格があり、再使用が可能であったため、裂は裏打ちをし直し、軸先とともに利用しました。旧軸棒には、過去の修理のときに記された墨書が確認されました。「春」の墨書からは、明治39年（1906）に東京の「表装師」が修理を行なったことがわかります。

修理前



修理後



明治三十九年九月下旬東京表装師京欽翁門人二世鈴木祐次五政作
四月三拾八日九月下旬東京表装師京欽翁門人二世鈴木祐次五政作

旧軸棒